

## 地下に隠れた知識の宝庫「唐山書店」

[空間本事]

店主 | 陳隆昊 (チェン・ロンハオ)

開業時期 | 1982 年

住所 | 台北市羅斯福路

取扱い分野 | 人文・社会科学、学術書籍

その他提供サービス | 出版、アート・文芸活動

取扱いの少ないマイナーな分野の学術書はどこに行けば入手できるのか——人文・社会科学を学ぶ学生たちは申し合わせたかのように「地下」を探す。壁から天井まで、さまざまなアート・文芸系のポスターがびっしりと貼り重ねられた階段を下りた地階に、唐山書店はある。一見、本が目一杯積み重ねられた倉庫のような店内には、新しい本の香りを覆うように湿り気を帯びたカビ臭さが漂う。多くの知識人たちにとって、この店は知識欲を満たしてくれる宝庫なのだそうだ。唐山書店は30年以上、一年また一年と学生たちの青春の日々に寄り添い、いくつもの学生運動の波を見守ってきた。そして目まぐるしく変化する時代の流れとともに、台湾の出版業界の栄枯衰退を経験してきた。

開業から現在に至るまで、唐山書店は三度の引っ越しをしているのだが、テナント料の節約のために、いずれも本が湿気の影響を受けやすい地下に店を構えている。敢えて「浮上」しようとしないので、誰かが冗談で“永遠の「地下書店」”と呼んだのも無理はない。1970年代生まれの作家、朱和之によれば「唐山書店を訪れるたびに、地下の秘密社会に潜入し武術の別派の秘伝書をのぞき見するような面白さがある」そうだ。

ウィットに富んだ話しぶりの唐山書店の店主チェン・ロンハオさんは、金庸の武侠小説に登場するお茶目な武術の達人おじいさん、老頑童を彷彿とさせる。チェンさんは自分のことを、無断で出版を行う「海賊」出身ですから、と悪戯っぽく言った。

お叱りを受ける前に、チェンさんが唐山書店を開いた1980年代の台湾について説明しておこう。当時の台湾では著作権の概念が曖昧模糊としていた。というのも、台湾が万国著作権条約を批准していなかったこともあって、海外の出版物を未許可で翻訳したり、原書をそのままコピーしたようなものが街中で堂々と売られていた。1994年のいわゆる「六一

二大限」以前の台湾では、洋書の高賊版の販売は違法ではなかった。（注：1994年6月10日に台湾の修正著作権法が施行され、6月12日より高賊版の販売は禁止となった。）

「とりわけいくつかの専門分野の学術書籍を台湾で入手することは、とても難しかったのです。そんなこともあって、大学の教授からの依頼で、教材のためにコピー本を作っていました」。チェンさんによれば、海外に行って本を買ってくることもままならず、また電子書籍もなかった1980年代当時、必要としている読者のためにコピー本を作るということは、必要に迫られて「宝物」を掘り起こすような行為だった。

そしてかつてのチェンさんの「高賊船」には、ある「宝物」が積まれていた——それは街中で買うことのできない禁書の類だ。当時は情報技術が今ほど発達はしておらず、加えて台湾には戒厳令が敷かれていた。政治的な理由からある種の本、例えばマルクス主義関連の著作や、魯迅や巴金といった中国大陸の左派作家による作品は「地下」に潜らざるを得なかった。この頃、右派だろうが左派だろうが、人々の知的欲求は留まることを知らず、熱を帯び、禁止されればされるほど、人々の好奇心は掻き立てられた。そして禁書の入手について考えうるあらゆる手段を尽くした人々が、唐山書店を訪れた。知的財産権保護の立場に立てば、この頃の欧米諸国にとって台湾＝高賊本王国という印象であっただろう。だが情報が限られていた時代においては、高賊本に書かれた文字が、多くの人々と国際レベルの学術界を繋いでいたのだ。今にして思えば、激しく変化する台湾社会の、ひとつの段階的なカタチだったと言えるのではないか。

#### [人物本事]

陳隆昊（チェン・ロンハオ）

台湾大学考古人類学系（現・人類学系）、政治大学中国国境地域政治研究所（現・民俗学系）卒業後、1980年に唐山出版社を設立。翌年唐山書店を開業以来30年以上、マイナーな本を必要としている人々への“アウトリーチ”精神を堅持し、多くの学生が人文科学分野を探索するのを見守り続けている。

#### [茶話本事]

Q. 最も影響を受けた本は？

A. マックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』。この本は資本主義の精神について深く議論されており、読者はこの本を通して非常に多くの事柄に

ついて分析を行うことができます。資本主義の大きな特徴のひとつは「簿記」で、商売上のあらゆることを記録するということです。例えば1602年に設立された連合東インド会社（オランダ東インド会社）は東南アジアで貿易を行っていました。今風に言えば国際企業で、本社はアムステルダム、ジャカルタにあったのがアジア統括部なら、台南の安平や日本の下関に支店を擁して、これは現代の資本主義モデルと一致します。『プロテスタンティズム〜』によって私は簿記について理解し、資料を保存することも教えてくれました。非常に大事なことです。当時の連合東インド会社では、毎日帳簿をつけることが規則で決まっていたので、オランダ統治時代に記された簿記は『ゼーランディア城日誌』として現在も存在しています。当時の様子がこと細かに記されていて、気象研究についてまで知ることができます。

※本原稿は翻訳作業中のもので、完成版とは異なる部分もございます。あらかじめご了承ください。